平成１４年度国語部会研究主題

１　研究主題

生きる力が育つ国語科授業の創造

主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる学習指導と評価のあり方

２　研究主題設定の理由

変化の時代と言われる２１世紀を主体的に生きるためには，生きて働くことばの力を身に付けるとともに，自他のことばを尊重する心情や態度を育てることが大事になる。特に，国語科においては，ことばを通して豊かに他とかかわりあう中で，自己実現していく子どもを育てることが求められる。

本県では，平成９年度より「生きる力を育てる国語科授業の創造」，平成１２年度より「生きる力が育つ国語科授業の創造」を主題として，実践研究に取り組んできた。子どもが主体であるという教育の原点を見据え，指導者は，一人一人の子どもに生きる力が「育つ」ことに意を注ぎ，「育つ」ように学びの場を設け，さまざまに手引きしてきたのである。一昨年度の研究大会会場校芝田小学校，そして昨年度の研究大会会場校石井小学校からは，国語能力系統表や「総合的な学習の時間」との関連を図った年間計画表，一人一人の子どもをとらえ指導・支援がなされた授業が展開された。この一連の実践研究を通して，ことばの力を系統的にとらえること，年間を見通し取り組むことや，一人一人のことばの生活の実態を把握することが，一時間の授業をいかに生き生きとしたものにするか，意義深いものにするかということが実感されることになった。また，ことばの力を系統的にとらえ，身に付けさせたいことばの力を焦点化することは，評価の基準を明確にすることと重なり，その評価のあり方を求める活動へと結び付いていった。身に付いたことばの力の評価だけでなく，課題意識の高まりや認識の深まりに対する評価の仕方，指導者や子どもの評価の力そのものを育てることへの関心が高まってきたのである。

教育課程審議会からは「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」の答申がなされ，目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価），指導と評価の一体化を図るといった新しい評価の考え方が示された。それを受け国立教育政策研究所からは，評価の規準が示され，基礎的・基本的な内容の習得とともに生きる力を育成するための評価のあり方が問われるようになったのである。生きる力が育つうえで，子どもが主体的に活動する場を通してことばの力を獲得するような学びを創出するとともに，そこでの評価のあり方が大きな意味をもつことになる。

このことを受け本年度は，生きる力が育つために，一人一人の子どもたちの何をどうとらえ，どのように評価し，指導を展開すればよいかといった，評価のあり方にも目を向け，研究を深めていきたいと考え，本研究主題を設定した。

３　研究主題についての考え方

（１）「生きる力が育つ国語科授業」とは

「生きる力」とは，「自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動することによって，よりよく問題を解決する資質や能力」と「自らを律しつつ，他人を思いやる心や感動する心をもった豊かな人間に備わった力」であり，子どもが主体的・自覚的に学習をすること

を通して育つものである。生きる力は国語科においては次のような力に分析することができる。

① 生活の中で言語を豊かにしていく力　② 言語による文化を享受し，創造する力
③ 言語を介して伝え合う力　④ 言語を介して情報を活用し産出する力
⑤ 言語によって思考する力

このような力が育つためには，子どものことばの生活をとらえたうえで，年間を見通し，いつ，どのような内容を取り上げ，どのような言語活動を経験させるのか。それを通して，どのようなことばの力を付けるのかなど，それぞれの単元のねらいを明確に位置付け，学習指導を展開することが大事になってくる。

（２）「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」とは

一人一人の子どもが主体となって言語活動に打ち込む中でこそ，生きて働くことばの力を身に付けることができる。そのような単元を構想するとともに，主体的に学ぶ力そのものを育てることへも意を注ぎたい。さらに，ことばやことばを学ぶことへの自覚を深めていかなければ，学ぶ力も育たないし，生きて働くことばの力も十分には身に付かないであろう。自己評価力の育成と重ねながら指導することが求められる。

以上のことから，「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」として，たとえば，次のような姿が考えられる。

① 自己のことばの生活の中から，価値ある課題を発見する力，また，ことばの生活や文化についての課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
② 情報の収集，選択など，課題を解決したり，自分なりの考えをつくり出したりするために，「話す・聞く」「書く」「読む」など言語活動を豊かに展開することができる子ども
③ 一人で考えるだけでなく，自分の考えを伝え合いながら，よりよい考えをつくり出していくために「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を豊かに展開することができる子ども
④ 一連の学習を通して，ことばへの学びの過程や成果を確認することができ，新たなる学びへの意欲へと変えていく子ども，自己評価の基準を高めていくなど評価への目を育てていく子ども

このような「主体的・自覚的にことばを学ぶ」子どもは，単元学習の理念が生かされた国語科授業が展開される中で育ってくる。その際，指導者は次の３つのことに留意しなければならない。

① 一人一人の子どものことばの生活を見つめ，どのようなことばの力を身に付けることがその子にとって大切なのかをとらえること。言い換えれば，その子が生きるために必要なことばの力をとらえることから，単元が構想され，そこでの言語活動が生まれてくる。
② そこでの学びが，その子にとって価値ある課題として，学習の対象に据えられていること。そのためには，子どもの生活に深く根ざした単元が構想され，必然性のある学びが組み立てられていくことが必要になってくる。
③ 言語活動を通してことばの力を生きて働く力として，また，生活（生きること）に根ざした力として，より確かに，かつ豊かに身に付けること。言語活動がめあてになるのではなく，その中でどのようなことばの力を育てるかという見極めと，どう発展させながらそのことばの力を育てていくかという見通しが求められる。

これらの実践にあたって，子どもたちの生活の中からどのように細やかにことばの実態をとらえられるか，身に付いたことばが生きて働く姿をどうとらえられるかなど，指導者自身の評価の力が大きく問われることになる。単に知識の量だけを評定するだけではなく，評価と指導・支援

の一体化，生きる力を育むための評価のあり方など，適切な評価のあり方を探っていくことが求められているのである。副主題に，「学習指導と評価のあり方」と「評価」を明記することにより，子ども一人一人の学びの意味をより確かに，より豊かにとらえたいと考えた。

４　研究の内容と方法

（１）子ども主体の授業を創出するために，子ども一人一人の生活に根ざした単元を構想する。

子どもが主体性をもって学習に取り組むためには，一人一人の子どもの生活を見つめ，その興味・関心・必要感やことばの力の実態を的確に把握することが欠かせない。子ども一人一人の生活に根ざした「課題」を設定することに心を配るとともに，個に応じたさまざまな学びが成立するような「場」を設け，目的に応じて学習材を編成していきたい。

（２）基礎・基本となることばの力を確実に身に付けることができるよう，次のことに留意する。

①　身に付けさせたいことばの力を明確にする。

６ヶ年を見通して，それぞれの単元の中で，どのようなことばの力を身に付けさせるかを明確にしておくことが欠かせない。

②　必然性のある言語活動を位置付ける。

その子にとっての基礎・基本となる「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力の実態をとらえ，必然性をもたせて学ぶ中で，生きて働く力として身に付けることができるような，単元を構想し，手引きしていくことが大切になってくる。

③　その力がどう身に付いたか評価のあり方を明確にする。

身に付けさせたいことばの力を明確にし，それを系統的にとらえたものが評価の規準（のり準）である。これまでの実践研究で取り組んできた国語能力系統表作りが，規準の明確化，細分化につながる。その一つの規準がどのように達成されているかをとらえる判断基準が評価の基準（もと準）である。実践や経験の中から基準を明らかにすることが，次に求められることになる。「評価の手引き」（県教育委員会）などをもとに，指導者自らの基準を明確にするとともに，互いに基準を練り合うことで，より客観性がある評価の基準を創出する。

例　規準・・・はっきりした発音で話す。
　　基準・・・Ａ：音のつながりの効果を考えて，はっきりと発音し，心地よく聞こえる。
　　Ｂ：基礎的な発音の仕方を意識し，はっきりと発音している。
　　Ｃ：母音や子音の発音が無造作であまり意識されていない。発音が曖昧である。

（３）子ども一人一人が主体的・自覚的にことばを学び続けようとする意欲・態度を育てるために，単元展開の過程に応じた，指導者の指導・支援と評価のあり方を検討する。

①　ことばの学習への課題意識を育てるための日常的な指導・支援と評価

②　自分自身にかかわることとしてことばを学ぼうとする課題へと高めるための指導・支援と評価

③　課題を追求する中で，自らの学びを深めたり，ことばについての関心を高めたりするための指導・支援と評価

④　自らの学びを振り返り，身に付いたことばの力や次への課題を確認するための指導・支援と評価

⑤　学習終了後，学んだことばの力やことばへの興味・関心が「総合的な学習の時間」や他教科等，あるいは生活の場などで生かされることへの見通しと，実際に生かされたことへの評価

（４）主体的・自覚的に学ぶ力を付けるために，次のことに配慮する。

①　他とかかわり合いながら学ぶ力を育てる。

他者と出会う中で，自己の存在をとらえ直すことや，自己を振り返るための多様な視点を得ることができる。主体的・自覚的に学ぶ力を付けるためには，他とかかわり合う力は欠かせない。特に国語科では，他とかかわり合うための，対話力・問答力及び討議力が育つよう計画的に指導・支援を試みる。さらに，学習の意味をとらえ合う活動や子ども同士の評価基準を練り合う活動など，他とかかわり合いながら自己評価の力そのものを育てる活動を模索していきたい。

②　自己の学びを確認する力を育てる。

学習に対する自己の取り組み方や考えたことなどを振り返り，記録として残していく作業が大事になる。「学習の記録」をまとめることを通して，自らの学びの価値や，次への課題をとらえる力が育ってくるのである。特に国語科では，必要なことを記録として書き記す力，継続して記録を書き重ねる力，「前書き」や「後書き」を書く力等が育つよう，計画的に指導していきたい。さらに，「身に付けたいことばの力」（子ども版）の表などをもとに，自己評価の基準そのものを振り返らせたり，基準の変容をとらえさせたりすることも求められる。

（５）「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図り，年間計画を作成する。

「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図ることにより，子どもの生活に根ざしたことばの力を育てる場が豊かに，必然性をもって生じてくる。このように必然性をもった言語活動の場が年間，さらには６年間を見通して計画されることにより，身に付けたことばの力を発展・応用しながら繰り返し学んでいくことができる。「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図る中で，生きて働くことばの力，あるいは基礎・基本となることばの力はより着実に身に付けられるであろう。互いのねらい（本質）を生かし合うことや多様な連携の姿を探ることに留意しながら，年間計画を作成したい。

（６）子どものことばの生活を豊かにするための環境を整える。

ことばの力を育てるためには，子どものことばの生活そのものを豊かにするための働きかけが大事になってくる。例えば，次のようなことに心を配りたい。

①　図書館の効果的な利用を図る。

情報センターとしての利用だけではなく，読むことの楽しさを味わう場としての図書館の存在は，ことばの生活だけでなく，子どもたちの心を育てる上でも大事になってくる。朝の読書や読み聞かせなど，読書への取り組みとともに，学校や地域の図書館の利用を子どもたちのことばの生活の中に位置付ける。

②　『作文読本』の効果的な活用を図る。

徳島県の子どもたちの書く力を育てるための月刊誌である。書く技術の育成面だけでなく，書くことを子どもたちの生活に位置付けるためにも，ぜひその活用を図りたい。

③　学級や学校の言語環境づくりに心がける。

音声言語としての指導者の話しことばや校内放送，文字環境としての背面黒板や掲示板の活用を図る。